肝要とす、柄杓亭主の置たるに違ぬ樣にすべし、猿戸枝折戸にても、末坐是を立べし、

〔貞要集四〕數寄屋外内路地入客亭作法之事附禮義之事

一手水の事、古來は朝會初入に手水遣不申候、晝は手水を遣申候、其子細は、昔は待合無之、客來り次第數奇屋へ入、相客を待合申候、亭主出て挨拶して、薄茶を立出し申候、それ故晝の會には手水遣申候、朝は空腹にて候へば、うす茶出不申候故、手水遣不申候、當世は朝夕共に手水遣申候事に成申候、數奇屋圍へ入申に、手水なしには不快候、扨手水鉢に柄杓置樣、亭主置申候を見置て手水を遣ひ、さて置方違不申候樣に可置、次々の客も同事、柄杓は横に置たるが能候、爐風爐に柄杓を掛候樣には可爲無用事、若風吹柄杓を吹散候はゞ、水を半分程汲入、仰てをきたるが能候、

一極寒の時湯桶を出し申候、古來は中立に出し申候、朝會に手水を遣不申候故也、當世は初入中立共に湯桶可出事也、

〔茶道要錄下賓法〕手水之事

水門へ立寄、先柄杓ノ置ヤウヲ能見テ、同友ニモ能見セシムベシ、鉢ノ形ニ因テ置ヤウアリ、善惡共ニ如元置ベシ、是法ナリ、水門前石ニトクト上リテ手水遣フベシ、又極寒ノ時分ハ、塗片口ニ湯ヲ入テ、即片口ノ石ニ置其湯ヲ遣、則蓋ヲ取テ水ヲ加テ、生熱湯トシテ掛テ可遣、湯多時ハ口ヨリ掛テ遣フ事難成、因テ柄杓ニテ汲用ユベシ、必熱キ湯ヲ置事ナリ、

一朝ハ手水不遣事、凡ソ手ヲ澡フノ本意、脂氣ヲ清テ茶具ヲ取携ンガ爲也、然ルニ朝ハ膩氣ナシ、此故ニ手ヲ不澡共ヨシ、但シ可清事アラバ各別ノ事也、

〔槐記〕享保十二年極月十一日、先日左馬頭ガ手水鉢ニサシタル湯ハ、アツスギタルニハアラズヤト仰也、〇近衛家熙覺悟不仕ト申ス、常修院殿〇慈胤法親王常々冬ノ手水鉢ニ湯ヲサスハ、ツメタクナキヲ專トス、手ヲ温ル爲ニ非ズ、ソレニハ湯桶アリト仰ナリト、尤ナルコトナリト、